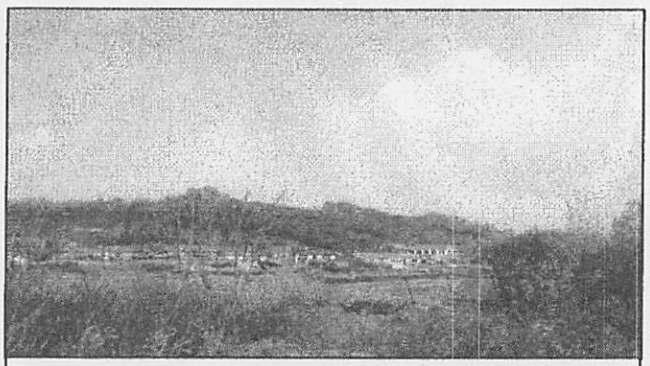
2013年中国フィールドワークの成果と課題：
WIDFの朝鮮戦争真相調査と中国の「抗米援朝戦争」

梁東淑

2013年11月4日朝8時。中国国際民航の旅客機は降り注ぐ日差しを突き抜け仁川空港を出発した。目的地は瀋陽。今回の中国への旅はまことに紆余曲折の果てに実現した旅だった。中国旅行をする時にビザが必要だということを後から知った私は目の前が真っ暗になった。今回の旅行は諦めようかと思った。しかし旅行を放棄することは仲間たちにもっと迷惑をかけることになりそうで、行くと決めてその方法を探した。幸いにも青島に立ち寄って当日ビザを発給してもらうという妙策があった。

飛行機が離陸してから約30分後、果てしなく続く青い山と平原、幾筋もの白い川の流れが視野に入ってきた。中国側の天候が好天であることを期待させるものだった。広々と開けた平野を横切って青島に到着した。ビザを受け取って瀋陽に行くために3時間待った。そして飛行機の離陸が遅れたためにさらに3時間待つことになった。瀋陽に先に到着して私を待っているはずの一行を思い浮かべれば、文句も言えないことだった。青島で足を踏み鳴らして苛立つ時間を耐えた後、ついに瀋陽に到着した。瀋陽空港は小さな田舎の駅前のような雰囲気だった。空が薄暗くなってきた。急いで一行と連絡を取って瀋陽北駅のバスターミナルへと向かった。

小さな満族食堂で満族風の夕食を簡単に済ませて、夜8時ごろ瀋陽北駅のバスターミナルから丹東に向かうバスへと乗り込んだ。丹東へと向かう夜道は寂しい田舎の風景だったが、二日後に丹東から瀋陽へと戻る時に見た丹東周辺の昼間の道の風景は、広い平野が果てしなく広がるところだった。低い山裾と丘に畑を開墾しながら住んでいる農民たちの生活の場が続いていたその道を走れば、ここが故郷に帰るどこかの道端ではないかと錯覚するほどだった。ぽつぽつと現れる集落も私の田舎の村のような感じだった。広々とした原野の田んぼを見下ろして、さほど遠くない昔、馬に乗ってこの道を駆けながら祖国を救おうと東奔西走しただろう我が抗日運動家の姿を思い浮かべると胸がいっぱいになった。果ての見えない田んぼと田んぼの真ん中に美柳木（訳注：ヤナギ科の落葉高木）に取り囲まれた集落を眺めながら、あの田んぼは日帝支配下で虐殺と搾取を避けて満州に追われてきた我が農民たちが切り開き、耕した土地の一部だと思うと感慨無量だった。夜道を3時間ほどバスに乗り、午後10時を過ぎてようやく丹東に到着した。こぢんまりと整った丹東市内に入った。市内の古びた建物を通り過ぎながら、このなかの古びた家のどれかは確かに


丹東の町

小説に出てきたあの懐かしい我が町のクッパ屋だったかもしれないと想像して、丹東の最初の夜を過ごした。

私たちの旅は二日目に丹東の鴨緑江の鉄橋の向こうに丸くて赤い太陽が昇ると同時に始まった。今回の調査旅行はモニカ・フェルトンと国際民主女性連盟（WIDF）朝鮮戦争真相調査団が 1951 年に朝鮮を訪問する軌跡を追跡する旅程であった。モニカ・フェルトンをはじめとした国際真相調査団の団員たちが危険を顧みず朝鮮戦争の最中だった朝鮮をなぜ訪問しようとしたのか。そして朝鮮で何を考え、世界に向かって何を伝えようとしたのか、女性史の視点から朝鮮戦争を考察しようとする趣旨が私たちの旅の主要な目的だった。残念なことに私たちは朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）を訪問することができず、WIDF 朝鮮戦争真相調査団がプラハ、モスクワ、シベリアを経て中国の瀋陽と丹東の地に到着した当時の中国ルートを歩くことで満足しなければならなかった。

調査団は中国を経て共和国の新義州と平壌などを訪問して朝鮮戦争の実相を調査した。新義州と平壌など破壊された都市を視察し、戦争孤児の施設を訪問し、住民の証言に耳を傾けた。そのようにして最終的に作成された報告書が＜朝鮮：私たちは弾劾する－1951 年 5 月 16 日～27 日の朝鮮における WIDF 委員会報告＞であった。調査団の結論は明白だった。占領地で数十万人の子供、老人、市民が拷問を受け、殴打され、焼かれて生き埋めにされた。数千、数万人が狭い監獄の中で飢えと寒さで死んでいった。罪もなく監獄で苦しむ大衆に対する拷問と虐殺は、ヒトラーが一時占領したヨーロッパで犯したナチの虐殺よりもさらに残虐であったという結論であった。

モニカ・フェルトンは朝鮮戦争が想像よりもずっと悲惨だということを知った。彼女は朝鮮で起こっている残酷な虐殺と蛮行に対して英国市民にも責任があると考えた。米軍のみならず英国軍もまた朝鮮人虐殺と蛮行に加担したのであり、さらに加担したのは朝鮮に派兵された派兵兵士だけではなく、このような行為が市民の名において行われるよう許容してきた英国の一般市民でもあると考えた。戦場の記憶が彼女を苦しめた。彼女はあのような戦場の実相と祖国復興、生活再建のために苦闘している朝鮮人との出会いを世界に伝えようと決心する。英国で朝鮮戦争の真実を知らせるために証言し、朝鮮平和のために国連の公式調査を訴えた。そして市民には、＜私が朝鮮で見たもの＞を通して、どんなに小さな行為を通じてでも、われわれ全員が朝鮮の平和、ひいては世界平和に寄与できると訴えた。

丹東の抗米援朝記念館

モニカ・フェルトンは共和国をもう一度訪問する。1952 年 9 月のことだった。二度目の訪問後、モニカ・フェルトンは共和国の物質的破壊が 51 年よりもいっそうひどい状態であり、これに対する住民の怒りがいっそう高まっている状況だと伝えた。しかし生活再建と相互扶助の精神が住民たちのあいだで高まっており、住民は非常に落ち着いて過ごしていると証言した。そして朝中の国境地帯に位置する捕虜収容所をも訪問した。モニカ・フェルトンをはじめとした WIDF 朝鮮戦争真相調査団の活躍は、朝鮮戦争を理解するのに非常に重要なきっかけを提供する。それなのに今まで韓国でこれについて注目した研究がただの一つもないという事実が信じがたいほどだ。1914 年、咸鏡北道の鏡城で生まれ、日本の上　智大学に留学し、解放後に越北した詩人の李庸岳（イ・ヨンアク）ただ一人が 1951 年の彼女を記憶しているのみだった。

親しみ深く、同時に写実主義的な態度で、満州・シベリアの流移民（訳注：他の地域から流れ込んできた人々）の悲劇的運命に関心を注ぎ、北方的な土着情緒を歌った 1930 年代後半期の朝鮮の代表的詩人、李庸岳。解放後には帰還同胞の貧しい現実と絶望感を告発し、朝鮮共産党系の文学団体で活動したこともあった。解放はされたが農地はおろか家と故郷まで二度も失った失郷民の姿を描きつつ見せてくれた歴史についての壮絶な絶叫は、流浪、貧困、家族の解体など、おそらくは壮絶な個人的体験から発するもののようだ。1948 年政府樹立以降、李庸岳は自ら行動の道を歩む。南労党への入党と不穏文書作成・配布の嫌疑で逮捕され、1950 年に 10 年の刑を宣告されたが、服役中に朝鮮戦争が勃発し越北する。彼が解放後、自分の詩集を編みながら語った「急いで旅立つべき道」の意味は、今日改めて歴史の方向性についての峻厳さとして迫ってくる。激変する歴史の一時期に一人の知識人が選択した「道」の意味は、彼の作品を通じてわれわれの前にくっきりと残っている。

モニカ・フェルトン夫人に

ー国際民主女性連盟調査団　英国代表モニカ・フェルトン夫人に対するアトリー政府の迫害を聞いてー

李庸岳(イ・ヨンアク、1914～1971)

真理は世界の良心を目覚めさせ
平和へ平和へと叫んでいるではありませんか
アトリーにとって最も恐ろしいのはまさにこれです。

モニカ・フェルトン夫人

かつてあなたが憤激に包まれて歩いたこの平壌(ピョンヤン)に
すでにれんが造りの煙突だけが残って立っている病院に、学校に
すでに悲しみを拒否した穴蔵の家に
今日も狂った爆弾が降り注いでいるのに

白髪混じりの母と愛する妹を失った
私はあなたに心から言います。
ーあなたは正当です。

あなたが痛みなしには別れることのできなかった
おかっぱ頭の子供ー
父は十字架に縛り付けられ川の水に、
母は乳房をえぐられた果てに息を引き取った
11歳のキム・ソンエに代わって

『誰が母さんを、姉さんを殺したのか』と
あなたが聞いたとき
長いまつ毛の両眼をかっと見開いて
『アメリカの奴ら』と憤って答えた
9歳のパク・サンオクに代わって

非常に不幸なあまりにも多くの人たちに代わって
私はあなたに心から言います。
ーあなたは正当です。

モニカ・フェルトン夫人

黄土の窪みに生きたままで葬られた
十や二十で数えきれない多くの子供たちと
百や二百で数えきれない女性たちの
『大きな墓』を暴いた5月のある半日
黄海道の名もなき山の峯には
流れる雲も避けて通り
ホオジロもどうしても歌うことができなかったろう

顔さえ見分けがつかなくなった
私たちのスドルとボクナムとオクヒたちの中で
あなたはあなたの街で朝夕に慣れ親しんだ
あなたのジョンとメアリーたちを
抱き起こさないでいられるはずはなかったでしょう

モニカ・フェルトン夫人

アトリーの徒党たちはあなたを
『反逆』の罪で裁こうとしています。
しかし、世界人民の峻烈な審判が
あいつらの襟首に下されずにはおかないということは
アトリーの足元を流れるテームズの
真っ暗な河波でさえも知っています。

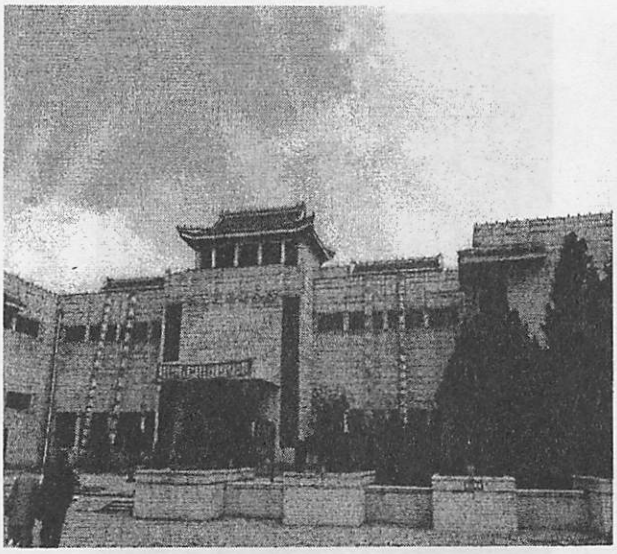
平和の戦列を明るく照らして立ち上がった
真理の松明を消すことができないから
日ごとにいっそう高まっていく真理の喊声を
沈黙させることはできないから

モニカ・フェルトン夫人

兄弟姉妹の鮮血が染みついた
兄弟姉妹の恨みと複讐に燃えるこの地で
米帝侵略軍の最後の一人を叩き伏せるまで
声をはりあげて泣くこともない朝鮮人たちは
あなたに心から言います。

ー私たちの戦いが必ず勝利するように
あなたの闘争も勝利します。

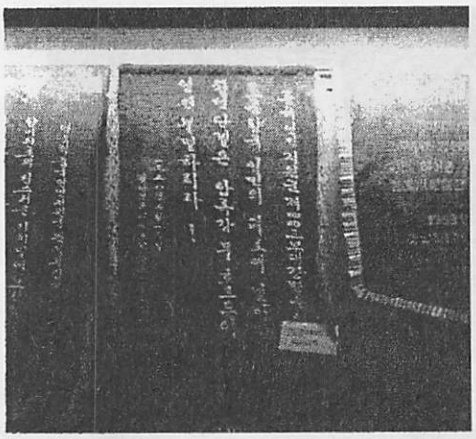
(1951年)



朝早く急いで宿を出て、私たちはイチョウが黄色く色づいた丹東の代表的な歴史遺跡である抗米援朝記念館へと向かった。果てしなく広がる公園に高くそびえる抗米援朝記念塔、巨大なモニュメント、迷路のような螺旋形の記念館は、丹東市が一目で見下ろせる場所に集まっていた。抗米援朝とは、資本主義を守旧する米帝の侵略に抗して、社会主義兄弟国家である朝鮮を助けるという意味であり、中国が朝鮮戦争に参戦した国際主義的名分をはっきりと示す表現だ。このように中国において朝鮮戦争はふつう「抗米援朝戦争」と呼ばれる。

中国は朝鮮戦争に述べ 240 万人以上の軍事作戦要員を派遣した。そして朝鮮戦争で 11 万 4 千人の中国人民志願軍が死亡し、25 万 2 千人が負傷し、捕虜を含む 2 万 5 千人が行方不明となった。多くの犠牲が発生したにも関わらず、米国に対する敵対視、賤視、無視の三視教育まで活用して展開した中国の抗米援朝戦争は、公式的に「勝利」した戦争と評価されている。そのような評価には異見も存在するが、少なくとも中国人民の次元での抗米援朝運動が成功したことは明らかにみえた。数えきれないほど多くの記念館の資料がそれを雄弁に物語っていた。

資料によれば、抗米援朝運動は平和署名運動、日本再武装反対運動、節約増産運動、愛国公約運動、軍人家族を助ける運動、武器献納運動のような多様な形態で行われた。平和署名運動には北京市の女性の 90%が参加し、愛国公約運動には全国農村人口の 70%が参加した。飛行機と武器献納のための運動では 1951 年 6 月から 1952 年 5 月まで、たった 1 年の間に戦闘機 3710 台分にあたる莫大な募金が集まったという。



丹東の抗米援朝記念館

中国の抗米援朝戦争の名分論理とは、もっとも通俗的な愛国主義だと主張する人もある。すなわち「保家衛国」運動であり、愛国主義運動へと転化され、国際主義運動である抗米援朝運動は中国内愛国主義の鼓吹を通じて成功裏に進められたという主張だ。女性も例外ではなく、抗米援朝のために女性も軍隊志願、軍事幹部学校への入学、医療隊志願、慰問の手紙および慰問品送り、愛国生産競争運動、平和署名、朝鮮難民を助ける募金活動、5大国平和公約締結要求、米帝侵略反対、日本再武装反対、米軍の細菌戦反対、節約増産運動、武器献納運動、愛国公約運動のような政治活動に大規模に参加したが、積極的に参加しただけ「国民になること」に成功したとしても、その核心はまさに愛国主義だったという主張だ。

抗米援朝期の中国女性解放運動の根幹が愛国主義だという事実は何を意味し、女性史の視点で朝鮮戦争を考察しようとする私たちはそれをどのように理解し、分析すべきだろうか。韓国と中国、日本の女性主義者の中には、これと関連して、中国あるいは共和国の社会主義女性解放が社会主義革命と国家によって与えられた、あるいは主導された。よって女性運動は自律的に歴史を持ちえなかったと批判する人々がよく見られる。あるいは近代国家および国民自体が男性を中心に想像され構築された以上、女性の国民化が真の女性解放ではありえないと主張する。一部の女性主義者は彼らとは違い、近代女性の主体性の根幹は国民国家に対する同一視による愛国心、または愛国主義だった。そのような現象は普遍性を帯びていたのであるから、そのような事実を無視してはならないと強調することを通じて、まるでそれ以外の他の女性主体性の形成の可能性は不在であるように前提し、上

記の主張に対して反論する。

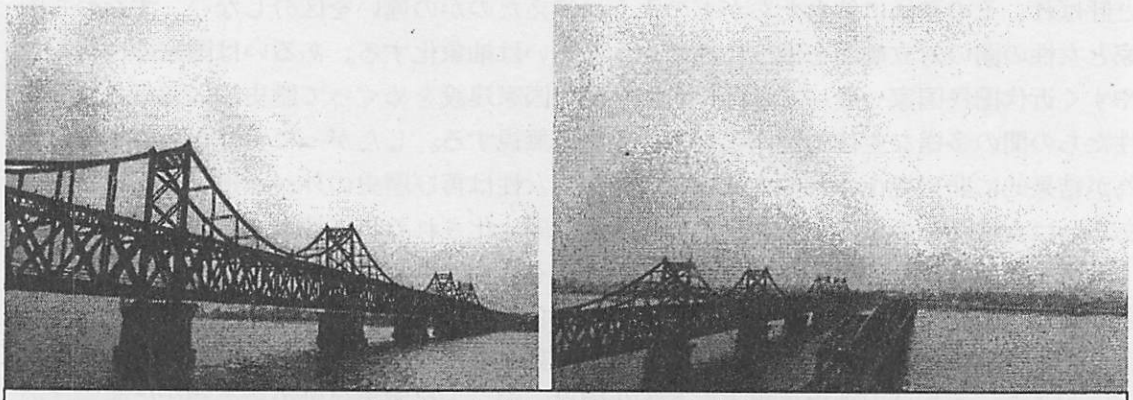
すべて重要な省察と洞察だ。しかしすべての主張は結果的に、なぜ、どうして女性が自ら進んで「国民」として呼ばれているのか、その過程でいかなる矛盾が発生し、女性自身が矛盾をどのように克服したり縫合してきたのかを見ることができなかったり、あるいは見ようとしていない。そのうえ女性が「国民」ではない「人民」として、あるいは「民衆」と呼ばれ、その発信に彼女たちがどのように答えたのかの違いを区分しない。すなわち国家と女性の間の対立側面を過度に極端化、あるいは抽象化する。あるいは国家の性格をたやすく近代国民国家一般へと抽象化して多様な国家建設をめぐって歴史的に遂行された女性たちの間の多様な主体的行為と努力の差異を無視する。したがって女性たちの主体的行為が結果的に非可視化されやすく、その結果、女性は再び歴史の外へと追いやられるか、あるいは女性たちの中にある差異が無視され、同一化される可能性が大きい。

女性史の視点から近代国民国家を批判的に見るためにも過去の女性たちが自身のためにどのような国家像を持ち、どのような国家と自らを同一視して、それと向き合ったのか、またその国家資源をどのように活用したのか、具体的に検討することが先行されねばならないだろう。これは女性史の視点から近代国民国家、人民国家建設のその時代にあっての意味に光を当てなおすための迂回路であり、同時に中国や韓国、さらには東アジアに特殊でありながら普遍的な現代性の軌跡を描き出す道でもあるだろう。中国の抗米援朝運動は、女性と近代人民国家建設、社会主義女性としての主体性の登場、東アジアの脱植民と冷戦局面が、実に複雑に錯綜した事件として充分に注目に値する価値がある。今までそれについての研究が韓国においてはほとんど皆無の状況であるが、韓国現代史研究者にとって今回のフィールドワークは実に多くの課題を投げかけた。

丹東の抗米援朝記念館-モニカ・フェルトン

抗米援朝記念館で、私たちはモニカ・フェルトンと偶然に出会うことができた。捕虜収容所で英国捕虜たちと歓談する大きな写真が記念館の傍らに掲げられていた。片手に煙草を持ち、明るい顔でにっこりと笑っていた。私たち一行は思いがけずモニカ・フェルトンの写真を発見して歓呼した。全員で煙草を吸うポーズを真似しながらその前で記念写真を撮ったりした。今回のフィールドワークの目的は何だったか、まさにモニカ・フェルトンとWIDF朝鮮戦争真相調査団の旅程を追跡することではないか。一枚の写真が私たちのすべての渇きを解消してくれた。写真は私たちに明確なメッセージを伝えてくれているよう

だった。中国の社会主義女性解放運動は、たしかに現在時点から見る時、多くの限界とジレンマを抱えている。だがしかし中国の女性解放運動は国家と社会運動に圧倒されたというよりは、それと不断に討論し批判し、協議しながら、能動的にそれを自己発見の契機として活用しようとした。抗米援朝運動は女性にとって、政治意識を高め、自信と主体性を吹き込み、国際連帯運動の経験の蓄積、女性組織の建設と拡大という贈り物をくれたのだ。



鴨緑江-中朝友義橋と鴨緑江断橋

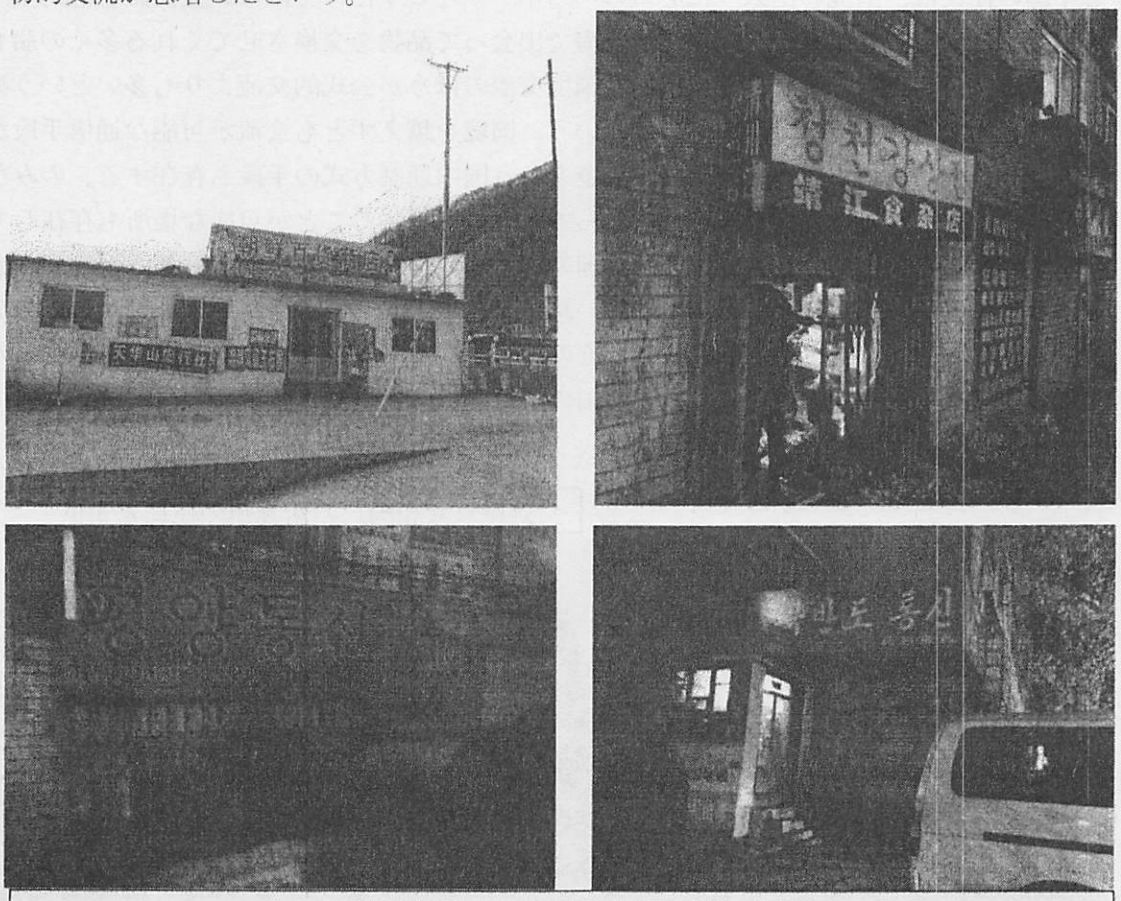
抗米援朝記念館を出て、次に向かったところは鴨緑江だった。一行4人はタクシー運転手をガイドにして鴨緑江周辺をフィールドワークしたりもした。運転手は25年以上丹東市内でタクシー運転手をしながら観光客のためのガイド役をしてきた。タクシーの中から見た丹東市内は、行く先々で平壌冷麺屋をはじめとした、共和国の都市名を付けた食堂が立ち並んでいた。丹東の「朝鮮・韓国民俗街」を歩いている頃には、韓国の田舎の市場を通り過ぎていくような見慣れた風景になった。丹東は中国遼寧省の東南側に位置しているが、国境として象徴される鴨緑江をはさんで共和国の新義州（平安北道）と向かい合う国境の辺境の町だ。だから鴨緑江の河辺の両側に住む国境地域の住人は、濃霧や太陽や月を同時に見、そして感じる。一日の日課は、一時間だという標準時差をはさんで繰り広げられる。さらに2000年になって中国政府が新たに造成した鴨緑江公園は朝夕に人で混み合っていた。

他方、新義州は表面的にはのどかな姿だった。丹東・鴨緑江周辺の観光遊覧船とボート、停泊している新義州の貨物船、または両国の国旗がはっきりと見える土砂採取船が鴨緑江の風景のすべてのように見える。しかし両国境地域の住人は鴨緑江を中心に共存しながら多様な人生の痕跡を埋め合わせていきつつあるように見えた。丹東の人々はよく『鴨緑江は海より深い』という表現を好んで使うという。おそらくは辺境都市、国境都市の丹東で、共和国出身者、中国人、朝鮮族、共和国系華僑、韓国人など多様な人と集団が、各々、あるいは一緒に生きることの意味を秘めて暮らしていることから出てきた表現だろう。

しばらく朝鮮半島の近現代史において丹東が持つ歴史の意味を吟味してみよう。日帝時代に丹東はアンボン（安東）と呼ばれた。中華人民共和国の樹立以降、1965年、中国政府は安東市を「紅色東方之省」という意味で丹東市と改名した。1908年12月、日本は清朝を圧迫して鴨緑江鉄橋の架設に関する協定を締結し、アンボン（安東）と朝鮮の鉄路を連結する事業を推進した。以降1911年10月、鴨緑江鉄橋を開通させた。丹東は現在まで共和国最大の対外的出口の役割を果たしているが、日帝時代にも1906年の京義線鉄道の開

通とともに中国との往来において門戸の役割を受け持っていた場所である。もちろん、豆満江があるが、咸鏡道を除いたその他の地域の中国との往来は、大部分、新義州と丹東を通って行われた。鴨緑江鉄橋を通って多くの破産農民たちが満州に移住し、また多くの抗日運動家たちがここを経由して抗日運動に身を投じたり、はじめからここを拠点として抗日運動を展開したりした。

他方で中華人民共和国の樹立以降は、共産党の土地改革によって丹東に住んでいる朝鮮族は自分の土地を獲得することができた。工業・商業に従事する人々は、朝鮮へと移住したり、丹東に残って国有企業の労働者として働いたりした。冷戦期の丹東は中ソ対立によって毛沢東が国境開発を制限したのにともなって新義州に依存したこともあったが、改革開放後に共和国と中国間の小規模辺境貿易が活性化すると同時に、朝鮮族、共和国系華僑などが丹東、新義州を中心に集まった。たとえばある報告によれば、2000年代から約10年を超える歳月の間に、中国の丹東には共和国出身者と共和国系華僑が約2000人、朝鮮族は8000人（丹東市の朝鮮族は15000人以上）、韓国人は約2000人前後、住んでいるという。1990年代中盤まででも、中国では遼寧省の丹東よりは吉林省の延辺国境地域のほうが朝中国境貿易の中心地とみなされていた。しかし1990年代を起点として中国では、国家の公式交流を中心にしたものから、辺境である国境を中心とした商業的個人交流へとその比重が高まった。このような変化は丹東の位置と役割に影響を及ぼした。韓国と中国の国交樹立以降、特に南北和解の時期には南北交流が活性化したので丹東を経由した人的・物的交流が急増したという。



鴨緑江周辺の共和国出身者が営む商店

丹東は辺境・国境都市であり、このように中国人と共和国の人々、そして最近では韓国人まで増加しており、多くの集団が集まって暮らしている独特な風景の都市を形成していきつつあった。韓国では、共和国出身者といえば脱北者だけを思い浮かべるのが普通である。脱北者とは異なる中国に居住する共和国出身者や、海外移住した共和国出身者の存在をおろそかにしたり、無視したりする。鴨緑江に象徴される共和国と中国の国境とは人が行き来することができない地域だという偏見を強く持っている。さらに共和国の人々が合法的・日常的に国境を出入りしているということは考えられもしていない。せいぜいのところ鴨緑江鉄橋に象徴される国境は、諜報戦を連想させる共和国の首領を乗せた汽車だけが行き来していると描写される。あるいは丹東から共和国へと向かうトラックだけが通過できると報道されている。反対に、共和国から丹東へと戻ってくるトラックは積み荷を積んでいない空のトラックとして報道されるのがお決まりだ。中国と共和国の国境を通過する民間交流はほとんどないというような記事は韓国の新聞のお馴染みのメニューである。しかし外部世界と徹底的に遮断された閉鎖国家というイメージの中でも丹東の共和国出身者の生活は、そのような私たちの偏見が出てきようのない生活のリアリティーをよく示していた。

丹東から新義州へは物資だけが届くのではない。物品とともに橋を通って人々が行き来している。共和国と中国を行き来しながら国境貿易をしている人もいる。親戚への訪問を兼ねて経済活動をするために汽車やトラック、またはバスに乗り込むこともある。共和国と中国の住民は、国境の出入りに必須のパスポートとビザだけではない渡江証を活用して国境を出入りしたりする。そのうえ河と海で出会って品物を交換させてくれる多くの船もある。これらが担当している非公式的な国境交流のほうが公式的交流よりも多いという事実は丹東の人にとっては公然の秘密だという。国境を越えずとも交流が可能な通信手段があり、国際電話料金を払わずに中国の料金を払う国内通話方式の手段も存在する。のみならず丹東の人と新義州の人が国境をはさんで肉声で対話することが可能な場所も存在している。鴨緑江の地理的特性と中国と共和国の国境条約の特殊性によって、都心から外郭地域へと出かければ、鴨緑江の本流ではない細い支流が流れている地域を人々は出会いと交流に活用している。私たち一行もまさにそのような場所に行き、ボートに乗って新義州の大地の１メートル手前まで行って、共和国の子供たちと住民に直接出会い、互いに挨拶まで交わすことができた。

対岸（共和国）の新義州の住民と子供

苦難の行軍以降、共和国は中国に生存を頼っている。共和国の民衆が依存している地下市場の商品の場合、90%以上が中国から搬入されているという。共和国政権の生存に必須な食糧、原油、兵器なども丹東を経由している。特に新政府樹立と2009年 第2次核実験以降、共和国の中国依存は強化されている。朝中関係が金正恩政権の生存にとって必須の要素になるなかで丹東と新義州は両国の玄関口の役割を強化している。しかし南北関係が悪化するとともに丹東を経由した南北交流、朝中交流はかなり委縮しているように見えた。そのような状況にあって、鴨緑江周辺で中国ガイドの商売の方法として流行っている共和国の子供を活用した商業的観光コースの開発も、困難な経済事情によって苦しい生活環境に置かれている共和国の子供の現実とかれらに対するイメージを搾取する象徴的姿として感じられた。一日も早く平和的な南北関係の模索とともに、朝中の境界地域である丹東地区において朝中交流、南北交流が活発に実現されることを期待したい。

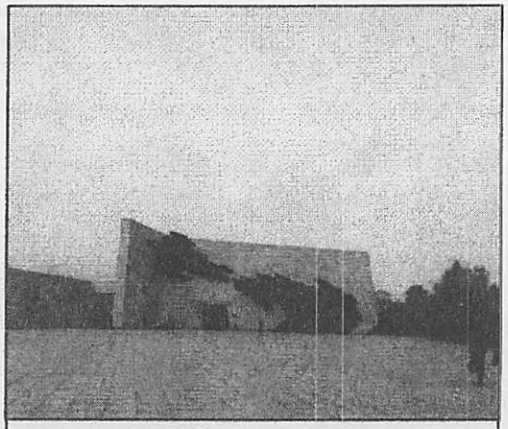
9.18歴史博物館、残歴碑

フィールドワーク3日目、初日の夜遅く到着したのでフィールドワークできなかった都市、瀋陽へと再び移動するために朝から慌ただしかった。鴨緑江を後ろにしたまま歩みを進めようとすると、心残りで物足りない気持ちになった。いつの日か鴨緑江を再び訪れる機会が来るなら、その時は新義州から丹東を眺めることができますように。もう一度、共和国の地である新義州に向かって最後の別れの挨拶をしてからバスに乗り込んだ。

瀋陽は日本が中国を侵略した日清戦争と日露戦争の主要な戦場であり、大陸侵略の戦略的関門都市であった。日中戦争が始まる前から日本が占領していた満州地域では、抗日戦争によって多くの犠牲が相次いだ。中国政府は1931年9月18日に発生した満州事変を記念するために、東北地域の中心地であり事変の発生地である遼寧省の瀋陽に9.18歴史博物館を設立した。私たちが瀋陽で最初に訪問した場所は、まさにそこだった。

中国政府が瀋陽に大規模な9.18歴史博物館を建設した理由は、おそらく東北地域の抗日戦争の犠牲と貢献を記憶するのみならず、自負心を奮い立たせる教育的意味もあるだろう。中国の大部分の抗戦記念館には、1972年9月25日に日本との国交回復を迎えて周恩来首相が言及した「以前のことを忘れず記憶することは後世の教訓になる（前事不忘、後事之師)」という言葉が掲げられているという。中国の記念館の共通のテーマである訳だ。抗戦記念館は一つの国家の歴史と伝統を保全するのみならず、大衆の参観を通じて自国の歴史と文化についての記憶を増強する空間であるということである。

瀋陽 9.18 歴史博物館は 1991 年に建設され、「国恥を忘れるな」というスローガンのもと 1999 年に拡張された。その後、日本による南京虐殺の否定と、首相の靖国神社参拝が続くと、日本の軍国主義を警戒するためにより強化された内容の展示によって 2001 年に 2 度目の開館をした。展示面積が 9180 平方メートルで、9.18 の意味を込めたそうだ。博物館は野外記念モニュメントと内部展示館に分かれていた。野外モニュメントは 9.18 残歴碑、警示鐘亭、勝利記念碑で構成されていた。9.18 残歴碑は花崗岩で作られた大きな卓上カレンダーの形をしている。カレンダーの始まりは 1931 年 9 月 18 日からになっていた。碑の左側には 9.18 事変の歴史的内容が刻まれている。碑の右側にある「警示鐘」の正面には「勿忘国恥」の 4 文字が、裏側には 9.18 事変の経過が記録されていた。喊声を上げる人体のレリーフ彫刻もあったが、抗争と奮闘の含意を込めていた。残歴碑が見ている人に 9.18 事変の時代を感じさせるならば、警示鐘は国恥日および侮辱と苦痛を忘れるなと警告しているようだった。博物館の広場には 9.18 歴史博物館と刻まれた江沢民の書、91.8 メートルの記念塔と爆弾の彫刻、奉天忠霊祠石碑などが展示されていた。奉天忠霊祠石碑は元々日本の靖国神社の分社であって、日露戦争から 9.18 の時期までは戦士した日本軍の遺骨を祀っていた場所であり、瀋陽の中華路付近にあったものが現在は 9.18 歴史博物館へと移されてきていた。東北地域に対する日本軍国主義の侵略の証拠物としてここで展示されていた。

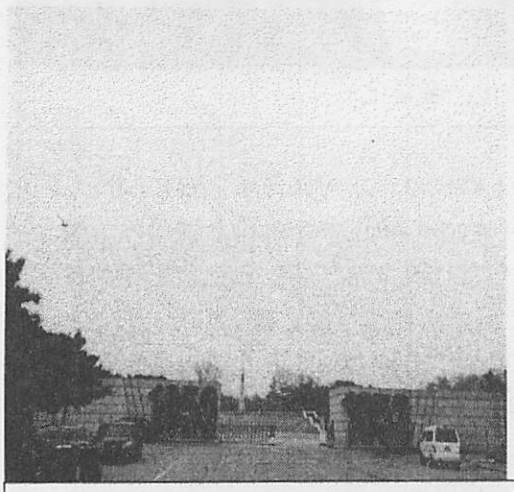


9.18 歴史博物館，レリーフ像

展示館の建物の長さは、すべての中国の記念館の中で最も長い 354 メートルであり、高さは抗戦 14 年を象徴する 14 メートルだという。展示館正面には青銅で鋳造された「国難」をテーマとしたレリーフ彫刻がある。このレリーフ像は 9.18 事変後の東北地域の支離滅裂さと流浪する人民の悲惨な状況を示しているようだった。展示館内部は東北人民抗争と勝利獲得の歴史的場面をあらわす歴史的遺物、写真、文献資料などを陳列して、この時期を再現していた。時期は 1894 年日清戦争からだが、1931 年 9.18 から 1945 年 8.15 までの 14 年間の東北地域抗争の歴史が中心であった。大部分の展示品、模型図、彫刻などを開放してあるので生々しい感じを受ける。

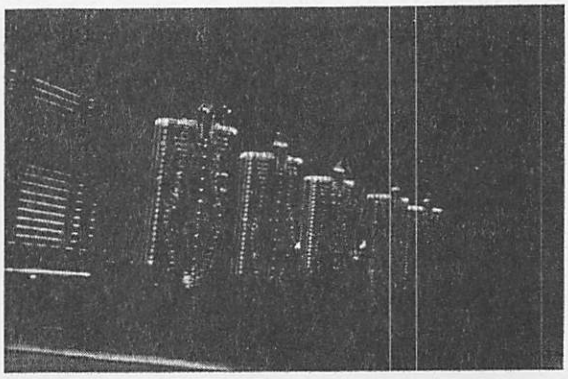
他方で日本は満州事変のとき、日露戦争の「栄光の記憶」をよみがえらせようとする記念事業を推進した。これは靖国神社の戦争博物館の日露戦争 100 周年記念展示でそのまま露呈されたことがある。満州事変に対する中国と日本の間のこのような観点の違いはその国の歴史認識の違いからきており、国家間の互いに異なるやり方の戦争記念へと帰結している。中日戦争の遺跡は、近代の韓・中・日関係を正確に認識させてくれる証拠だ。したがって中国と日本の間の歴史争点と戦争記念問題は中国・日本と戦争経験を共有する我が韓国とも密接な関連があるのであり、戦争記念館だけがあって平和記念館がない私たち韓国人にとっても示唆するところが非常に大きい。

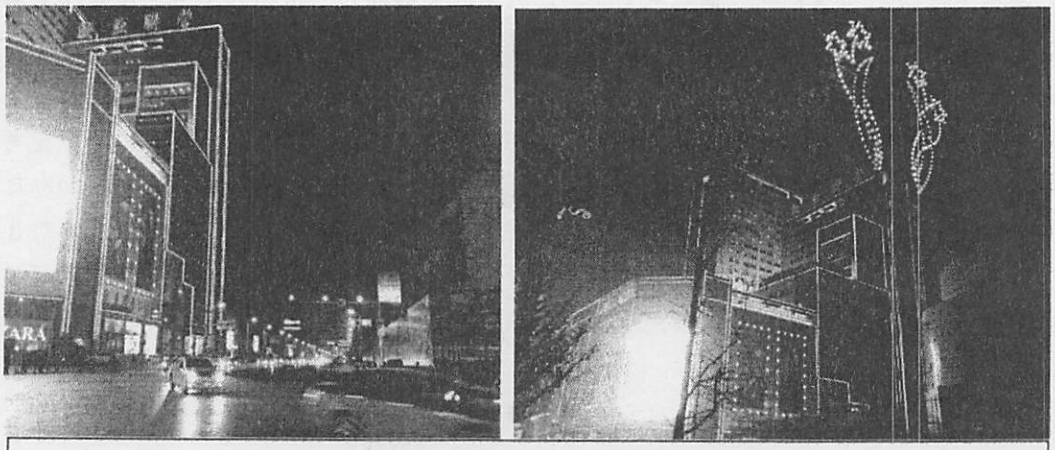
戦争の真実を認識して、戦争の本質が何なのかを理解し、平和な未来を構築する叡智を培うのに役立つ戦争遺跡の保護と展示は、被害者である国家と民族のみならず戦争を引き起こした国家と民衆、および全人類にとって幅広い覚醒と教育の意味を持たねばならないだろう。過去の戦争の要衝地が同時に平和時の交流と協力の現場だったという点を考える時、これからは戦争遺跡と記念館は未来の平和を志向する場所へと昇華させていけたらと願う。戦争遺跡の保護と戦争博物館の建設、そして平和教育の領域で韓・中・日の3国が互いに協力を模索して、三国が共同で戦争の事実を調査・研究して戦争遺跡を東アジアの新しい未来を拓く平和と平和教育の場へと転換させる努力を傾注していくことを祈りたい。



瀋陽の 1950-1953 抗米援朝烈士記念館

いつの間にか瀋陽の都心は夕陽に染まっていた。「1950－1953年 抗米援朝烈士記念館」に向かって私たちは歩き、また歩いた。門が閉まっていて資料館を見て歩くことができなくてがっかりだった。抗米援朝を戦った烈士たちの墓にお参りし、塔の前で黙とうすることで満足せねばならなかった。中国フィールドワークはたいへんなハードスケジュールだった。広大な大陸、どこに行っても大規模に作られた記念館や博物館をフィールドワークするのは簡単なことではなかった。帰国後1か月のあいだ、顔に出来物ができて化膿するほど疲労した旅行だった。移動時間も長く、歩く区間も長かった。しかしWIDF朝鮮戦争調査団がその昔、瀋陽に到達したときは、今の私たちよりももっと大変な旅行だったろうと考えて、それを慰めとした。





瀋陽の夜景-都市化、産業化

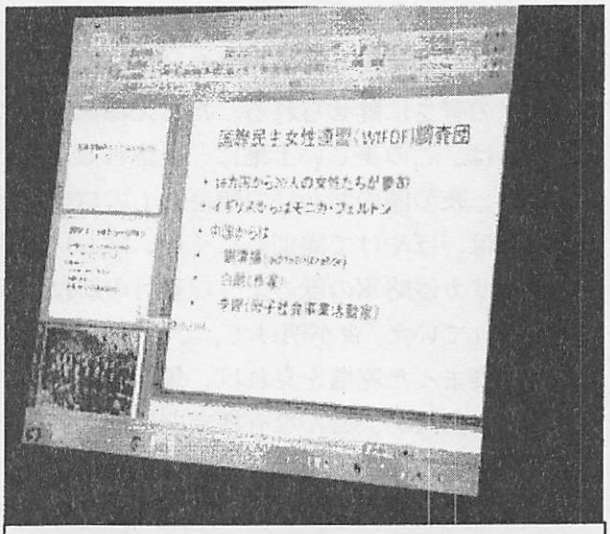
瀋陽の抗米援朝烈士記念館から出て宿に向かう時には、すでに薄暗い夜になっていた。フィールドワークの最後の夜だった。宿に向かいながら車内から眺めた瀋陽の華麗なネオンサインと高層ビルの明かりの夜景は今も忘れられないほどに多くの想念を呼び起こした。20年前に瀋陽に来た時とは雲泥の差で変わってしまった都市化、産業化だった。

中国は今に至るまで依然として農村人口が絶対的比重を占めている農民国家だ。中国で過去100年の間に起った3回の内戦は農民革命が主体の「土地革命戦争」だといわれる。解放後の新民主主義は農民の要求を満たす土地革命から始まった。社会主義的改造もまた農民を組織する合作化から始められた。近来20年の間の改革も農民の自発的改革から出発した。中国はいかなる理論を動員しても結局のところ問題は「農村、農民、農業」という、いわゆる「三農」問題をきちんと説明するのかの問題に帰着するので、それを通じて検証されるほかないという。したがって中国問題は基本的に「人口は膨張し、資源は不足している農民国家が工業化の発展をどのように追求するのかの問題」だと要約されたりもする。瀋陽の都市化はこのような現在の中国問題を集約的に示しているようだった。

都市化、産業化の実質は資本集積と人口集中だという点は常識だ。人為的に都市化を早めて資本が都市へ集中される速度が速まれば、都市に危険が集中される速度もそれにつれて速まる。危険が過度に早く集中されて都市危機の爆発が招来するとすれば、その時その危機を遅延させる媒体が果たして何なのか、中国の人は知っているだろうか。単純に都市化、工業化と同時に機械化と化学化の農業現代化を推進するからといって、グローバル資本主義競争において勝利することはできないだろう。中国の工業が規模の面でもっとも大きなことは事実だが、構造は弱体で生産は過剰である。資本主義の普遍的な内的矛盾によって病態的によりいっそう大きな過剰生産を続ける体制が誇れるものは何があるのか、再度、批判検討すべき問題ではないか。

中国の各地方政府がすべて工業化、都市化、農業現代化という「三化統一」を同時加速的に追求している状況において、中国はすでに多くの開発途上国が経験した失敗事例を決して忘れないでほしいと思う。すでに中国内部からそのような知性の声が聞こえるようだ。発展至上主義の時代に中国農民をはじめとした人民たちの居場所はどこにあるのかと問う中国内の良心的意見が尊重されるような状況であってほしい。この間の中華人民共和国の歴史を見れば、艱難辛苦の果てに国家の基盤を固め、今のような世界的存在感を確立する

過程で農民と人民が多くの犠牲を耐え忍んできたことが分かる。このような歴史をきちんと究明し、それに合った諸政策が農民と人民たちのために工夫されることを望みたい。その過程で中国は本当に西欧式資本主義の現代化の道を進むべきなのか、中国式現代化の道はいったいどこにあるのか。このような問題に対して執拗に問い続けてほしいと思う。西欧資本主義式の現代化の華麗な外皮は植民地国家の民衆が被る莫大な犠牲を前提にしたものであるほかなかった。植民地だった多くの国々が第2次世界大戦後に解放されたが、不平等は続き、後発国家として西欧式現代化をそのまま模倣したが、これは自身を西欧の植民地主義の列車に縛り付け続けることであり、グローバル資本主義の鎖に繋がれたまま西欧の先進国のために利益を提供し、危険と負担を抱える犠牲者の役割をするだけである。この道が中国の道であってはならないだろう。



フィールドワーク最後の夜、
宿でのワークショップ

あれやこれやの考えとともに、いつかフィールドワーク最後の夜を迎えることになった。私たちの旅のフィナーレは宿で開いた小さなワークショップだった。ワークショップのためにこの遠い中国の地までノートパソコンとプロジェクターを旅の荷物として持ってこられた藤目先生の情熱に全員が驚かされ、韓国現代史研究者であり女性史研究者というだけでついうっかりと中国旅行に付いて来た自分自身が少し恥ずかしかった。しかし今回の旅は私にとって多くのことを学ぶきっかけになった。資本の危機を転嫁する植民地戦争によって被害をこうむった東アジア国家の民衆であると同時に女性として、韓国と中国は非常に多くの共通の言語を持っていると思う。長い間冷戦イデオロギーによって隠ぺいされ、間違った認識へと誘導されたため、容易く解決することの難しい問題として残っていた互いの歴史、そして私たちの女性史とどのように客観的に向き合うべきなのかを省察する非常に有益な時間だった。